



沿岸部に設置された堤防は、震災後にかさ上げされた。穏やかに見える海の脅威は、地域の人々が最もよく知っている



漁船に乗せてくれた小野さん(右から3人目)、HOPEのスタッフたちと

と津波だ。2011年の東日本大震災と04年のインド洋スマトラ沖大地震・インド洋津波。この2つの自然災害は、大切な人を、家を、仕事を奪った。「漁船も漁協も流されてしまった。それでもここを離れるなんて選択肢はなかった。海が好きだからね」と小野さん。これまで地域を挙げて懸命に復興が進められてきたが、いまだ多くの人が、東松島市内の仮設住宅で生活を送っている。

一方で、バンダ・アチエでは、「ツナミ」という言葉すら知らず、多くの人が逃げ遅れて命を落としてしまいました。そんなハフリザさんは、なんと日本のマンガを通じて、津波の恐ろしさを知っていた。すぐさま家族と友人を連れて高台に避難し、九死に一生を得た。

### 共に災害に立ち向かう

通じて、津波の恐ろしさを知っていた。そんな2つの都市に、3・11の後、つながりが生まれた。国は違えど、思いは一つ。「災害と向き合い、みんなで地域を支えていきたい」。相互復興をキーワードに、研修という形で交流が始まった。

小野さん。バンダ・アチエでも漁業は重要な産業であるが故に、準備した質問項目は20以上。震災直後の様子や原発問題など、2人の容赦ない問い掛けに、小野さんは一つ一つ、丁寧に答えてくれた。「ま、漁師に必要なのは勘と度胸だよ。その豪快な笑いに、2人の緊張がほぐれる。「東松島に住んでみて、人々の復興にかける思い、地域のつながりの強さを感じます。きっとこれが復興のカギですな」とマルトウニスさんはうなずいていた。

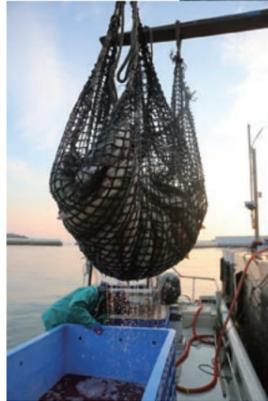


HOPEのオフィスでは、インドネシアと東松島の復興について情報共有が行われている

※東松島市が目指す「環境未来都市」の推進、震災からの迅速な復興を実現するために、行政と民間を仲立ちする機関として2012年10月に設立。東松島式復興モデルの海外普及を目指す。

朝日が昇り始めたころ、定置網の設置場所に到着。インドネシアの研修員も一緒に引上げて

獲れたサケは漁協から市場に回される



「よいし、引き上げるぞー」「ハイ、1、2、3！」赤茶色の網を海の中から引っ張り上げると、大きなサケがバタバタと音を立てて姿を現した。「今日は少ないなあ。もうサケの時期は終わりでな」そうは言っても、網の中は丸々としたサケがぎっしりだ。10月末、宮城県東松島市の宮戸島沖。冬が真近に迫る東北の海は、漁師の小野幸男さんいわく、絶好の漁日和。早朝6時、真っ赤な朝日を

包み込むように、穏やかな海が広がる。風は冷たいが心地良い。「おい、その2人、大丈夫か？しっかり網を持って！」小野さんたちの漁船には、いつもと違うメンバーが乗っていた。インドネシアのバンダ・アチエ市役所の職員、ハフリザさんとユリ・マルトウニスさん。今年の3月から、一般社団法人東松島みらいとし機構(HOPE)※で研修中の2人。この日は東松島の漁業復興のノウハウを学ぶため、定置網漁の視察に

東松島の漁業について、熱心に質問するマルトウニスさん(右)とハフリザさん

写真=渋谷敦志(フォトジャーナリスト)

# 宮城県



東松島市

## 共に支え合うまちづくり

東日本大震災から間もなく3年。刻々と状況が変化する中、今日も復興に向けて歩みを進める人たちがいる。宮城県東松島市では、その輪の中に、インドネシアのバンダ・アチエ市役所の職員がいた。

